

メタ言語的否定再考

井筒（成田）美津子

0. はじめに

Horn (1985, 1989) は、(1)の各文（最初の節）に用いられている否定をメタ言語的否定 (metalinguistic negation) と呼ぶ。

- (1) a. The king of France isn't bald — there isn't any king of France.
b. Max doesn't have three children — he has four.
b'. Max has not three but four children.

メタ言語的否定は、話者が既出の発話を否定する (“deny or object to any aspect of a previous utterance” 1985: 144) 用法で、命題内容を否定する記述的否定 (descriptive negation) とは区別される。

また、メタ言語的否定は一般的な真理関数演算子に還元できない (“irreducible to the ordinary internal truth-functional operator” *ibid.* 132) という点でも記述的否定と対立を成す。Horn は、(1 b) と類似した(2)のような文を、真理値に還元できるという理由から、メタ言語的否定ではなく記述的否定と分類する。

- (2) Max doesn't have three children, (but) he has two.

この論文では、論理的に矛盾のない(2)のような文でも、既出の発話を否定するのに用いられることから、(1)のような文と等しく扱えることを示す。そして、

既出の発話を否定するという発話行為をまとめて却下 (rejection) と呼び、これを2つのタイプ (rejection type (e.g.1a) と rejection-substitution type (e.g. 1b, 1b')) に分け、それぞれの意味特徴を説明する。さらに、後者の意味構造を記述することによって、このタイプ特有の *not A but B* 構文に現れる接続詞 *but* (又は同様の環境に現れるドイツ語 *sondern*、スペイン語 *sino* 等) の意味と他の逆接の意味 (対照) との共通点・相違点を明らかにする。

1. Horn のメタ言語的否定について

1.1 概観

既出の発話を否定するメタ言語的否定は、前提や含意、さらには発音や形態素、語の使用の仕方など、先行する発話のあらゆる側面を否定するのに用いられる。

- (3) a. The king of France isn't bald — there isn't any king of France.
 b. John didn't MANAGE to solve some problems — they were quite easy for him to do.
 c. He didn't call the [pólis], he called the [polís].
 d. I didn't manage to trap two mongeese — I managed to trap two mongooses.
 e. For a pessimist like him, the glass isn't half full — it's half empty.

(3 a) はいわゆる外部否定 (external negation) の文であるが、この文では最初の節の確定記述表現 *the king of France* が前提としている「フランスに王が存在すること」が否定されている。(3 b) では、最初の節の慣習的含意「ジョンが解いている問題は難しい」が否定され、(3 c)、(3 d)、(3 e) では *police* の強勢の位置、*mongoose* の複数形、液体が半分入ったグラスの表現の仕方がそれぞれ最初の節で否定されている。

Horn はメタ言語的否定の統語的特徴を3つ挙げている。第一に、メタ言語的否定は、否定を接頭辞で表わすことが出来ない。

- (4) a. The king of France is {*unhappy/not happy} — there isn't any king of France.
b. It is {*impossible/not possible} for you to leave now — it's necessary.

このように語の一部の要素として、否定を表わすことが出来ないのは、メタ言語的否定が「同一節の他の部分とは異なるレベルで働いている (“it operates, in effect, on another level from that of the rest of the clause in which it is superficially situated” 1989: 392)」ためであると、Horn は説明している。

また、2つ目の統語的特徴として、否定の作用域内に否定極性を持つ要素が現れない、ということがある。

- (5) a. John didn't manage to solve {*any/some} of the problems — he managed to solve all of them.
b. Chlamydia is not {*ever/sometimes} misdiagnosed, it is frequently misdiagnosed.

これも、第一の場合と同様、メタ言語的否定が節の他の部分とは異なるレベルで作用しているということと関係している。

三番目の特徴は、逆接を表わす接続詞の現れ方に関するものである。英語やフランス語と違い、スペイン語やドイツ語には2種類の逆接を表わす等位接続詞がある（スペイン語 *sino/pero*、ドイツ語 *sondern/aber*）が、メタ言語的否定はこのうち一方としか共起しない。Anscombe and Ducrot (1976) によると、メタ言語的否定（彼等の言葉では *négation polémique*）は *sino* や *sondern* といった SN-type の接続詞としか用いられず、*pero* や *aber* といった PA-type

の接続詞とは共起しない。

- (6) Sp: *Eso { *es inconsciente/no es consciente}, sino totalmente automático.*
 Ger: *Das ist { *unbewusst/nicht bewusst}, sondern ganz automatisch.*
 'It is { *unconscious/not conscious} but (rather) totally automatic.'

(6)はメタ言語的否定を含む文である。このことは否定接頭辞が現れることが出来ないことから明らかである。各文に SN-type の接続詞が使用されていることから分かるように、メタ言語的否定は PA-type ではなく、SN-type の接続詞と相関的に用いられる。

Horn は、このようなメタ言語的否定を、命題内容の虚偽性 (falsity) とは関係ないものとし、むしろ既出の発話を断定 (assert) したくないという話者の態度 (“the speaker’s unwillingness to assert a given proposition in a given way” 1985: 122) を表わす用法であると説明している。そして、命題内容を否定する記述的否定に対し、メタ言語的否定は発話の断定性 (assertability) を否定するものであると述べている。

1.2 Horn (1985, 1989) の問題点

このメタ言語的否定という概念は、自然言語における否定の用法を捉えようとしている点で重要であるが、この種の否定に対する Horn の説明には問題点も多い (e.g. Burton-Roberts 1989, McCawley 1991)。本節では、このような多くの問題点の中から、メタ言語的否定と記述的否定との関係について議論する。

(3)で見たように、Horn が挙げているメタ言語的否定の例は、論理学の真理条件では適切に説明することが出来ない場合がほとんどである。例えば、(3 a)は Frege (1892)、Strawson (1950) 以来二値論理の考え方では上手く説明できない現象として長い間哲学的論議を生んだ文であるし、(3 b)は文の真理値には関係のない慣習的含意が否定されている文である。さらに (3 c)、(3 d) では同一

語に関する2種類の発音や複数形を比べ、一方を否定しもう一方を断定しているので、これらは論理的に矛盾する。また、(3e)でも「グラスが半分満たされている」と「グラスが半分空っぽである」ということは意味的には同値なので、ここでも一方を否定し他方を断定するのは論理的に矛盾している。

さらに、Horn (1985: 139, 166) は標準的な真理値に還元できない例として(7)のような尺度表現を含む文を挙げている。

- (7) a. Max doesn't have three children — he has four.
b. It isn't warm today — it's hot.
c. Around here, we don't like coffee — we love it.

(7a) のように「彼に4人子供がいる」ということは、「3人の子供がいる」ということを論理的に含意するので、それを同一文内で否定するということは論理的に矛盾する。また、(7b)でも hot は warm を論理的に含意するので、hot を断定しかつ warm を否定することは論理的には無理である。(7c) も同じである。Horn は、このように否定される要素が後続する節の要素よりも、尺度上、値が小さい場合、その否定はメタ言語的否定であり、これらの文で否定されているのは命題内容ではなく、その命題内容に関連して生み出される会話の含意 (conversational implicature) であると述べている。この会話の含意は、尺度表現に上限 (upper bound) を付与するもので、(7') のように just や only といった副詞を用いて表現される。

- (7') a. Max doesn't have (just) THREE children — he has FOUR.
b. It isn't (just) WARM — it's HOT.
c. Around here, we don't (just) LIKE coffee — we LOVE it.

一方、(8)のように否定される要素が後続する節の要素よりも値が大きい場合、今見たような論理的矛盾は生じない。従ってこれらの文の否定は命題内容を否

定する記述的否定であると Horn は説明する。

- (8) a. Max doesn't have three children — he has two.
b. It isn't hot today — it's warm.
c. We don't love coffee — we like it.

このように見ると、Horn のメタ言語的否定についての議論は、真理条件で表わすことが出来ない有標の否定 (marked negation) の場合が中心となっている。従って、論理的に矛盾することのない命題内容をメタ言語的に否定することは一見ありえないように思われる。これについては、Carston (1996) も次のように述べている。

Most people seem to assume that since descriptive negation deals with truth-conditional content, this other kind of negation, used to register an objection, need not and does not.

(Carston 1996: 311)

しかし、次の 2 組の文を見てみよう。

- (9) A: The king of France is bald.
B: The king of France isn't bald — there isn't any king of France.
(10) A: The prime minister of Japan is bald.
B: The prime minister of Japan isn't bald, though his hair is getting thin these days.

(9 B) の最初の節は真理値に還元することが出来ない有標の否定文であり、(10 B) は真理条件的な無標の否定文 (unmarked negation) である。従って、Horn の説明に従うと、前者がメタ言語的否定、後者が記述的否定となる。しかし、

「既出の発話を否定する (objecting a previous utterance)」というメタ言語的否定の働きを考えると、これら2つの文の否定は同じ働きをしている。両者とも先行するAの発話を却下しているのである。

同じようなことは尺度表現の場合についても言える。先程述べたように、Hornは(7)と(8)という一見類似した文でも、否定される尺度表現が後続する尺度表現よりも値が低い場合(例えば(7)の場合)にはメタ言語的否定が、否定される表現の方が値が高い場合(例えば(8)の場合)には記述的否定が関与していると説明している。確かに、(8)は論理的に何も矛盾が無く、普通の命題内容の否定と考えることが出来る。しかし、この種の文が以下のような文脈で用いられると、各Bの発話は「既出の発話(又はそこから推論される想定)を否定する」という点で全て同じ働きをしている。この働きは、有標の否定文(11 B、13 B)であろうと無標の否定文(12 B、14 B)であろうと同じである。

(11) A: I am going to give Christmas presents to Max's children. Yesterday I bought three teddy bears at TOYS "Я" S.

B: Max doesn't have three children — he has four. He has one daughter and three sons.

(12) A: I am going to give Christmas presents to Max's children. Yesterday I bought three teddy bears at TOYS "Я" S.

B: Max doesn't have three children — he has two. He has one daughter and one son.

(13) (A (a student from Africa) and B (a student from England) are at an international student bureau.)

A: Hi! It's warm today.

B: It isn't warm today — it's hot.

(14) (A (a student from England) and B (a student from Africa) are at an international student bureau.)

A: Hi! It's hot today.

B: It isn't hot today — it's warm.

さらに、Dancygier (1992) は、(11 B) と (12 B) の発話をポーランド語の構成素否定の形で表わすと、両方とも SN-type の接続詞 *a* が用いられるということを描している (ちなみに、ポーランド語の PA-type の逆接接続詞は *ale* である)。

(11') *Max ma nie troje dzieci, a czworo.*

'Max has not three children, but four.'

(12') *Max ma nie troje dzieci, a dwoje.*

'Max has not three children, but two.' (Dancygier 1992: 67)

このように、ポーランド語の接続詞 *a* はそれを含む文が真理条件的か否かに関係なく (つまり、尺度上の値の大小に関係なく)、了解されている情報に不賛成を示す場合に用いられる。

Both interlocutors in the speech exchanges concluded with (11b) [= (12')] and (12b) [= (11')] believe that Max has children, but they seem to disagree on how many he has, and the direction of the scale in which the correction is to be made does not seem to matter in a constituent negation format in Polish.

(Dancygier *ibid.*)

このポーランド語の SN-type の接続詞 *a* の分布から考えても、既出の発話を否定する用法は1つの自然類 (natural class) を成すと考えられる。この否定の用法全てに共通するのは、先行する発話内の表現を不適切なものとして却下するという発話行為 (speech act) である。

そこで、以下では真理条件的か否かに関係なく、先行する発話 (又はそこか

ら推論される想定) を却下する発話行為をまとめて「却下 (rejection)」と呼び、これを以下のように定義する。¹

(15) Rejection is the act of rejecting the choice of an expression in the previous utterance.

この中の expression という語は、発話の命題内容と形式的な言語表現両方を表わす。これは、何度も述べているように、既出の発話の否定には発音・形態素を含めた言語形式の否定だけではなく、既出の命題内容の否定も含まれるからである。さらに、(15) は (3 a) や (3 b) で見たような前提や含意を否定する場合にも当てはまる。(3 a) や (3 b) は、ある表現が前提 (含意) する内容が不適切であるという理由から、その表現を選んだことを却下している文である。

以上のことから、Horn 自身が述べているように、既出の発話を却下するという発話行為は命題内容を否定する記述的否定とは別のレベルで働いていると言える。この「別のレベル」とは、いわゆる「発話行為のレベル (speech-act level)」で、これは Sweetser (1990) の言う speech-act domain に相当する。従って、「却下 (rejection)」は条件節や接続詞、法表現などの発話行為的用法と並んで、発話行為のレベルで作用する否定の用法であると言える。

これまでの議論を簡単に図示すると以下のようなになる。図の長方形部分が「却下 (rejection)」、正方形部分が記述的否定である。重なり合っている部分は、

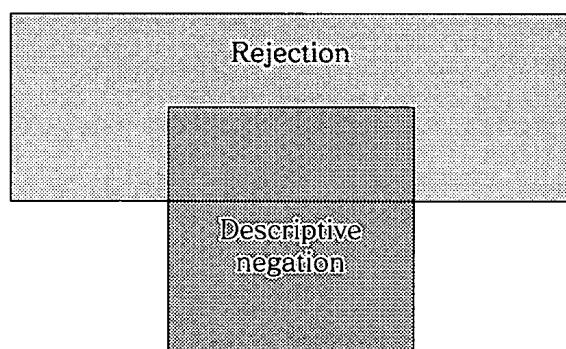


図 1

(10)や(12)、(14)のような先行する文の命題内容（又はそこから推論される想定）を否定し、その否定が論理的に何も矛盾しない場合である。Hornのメタ言語的否定という概念は、既出の発話を否定するという働きから考えると、ここで述べている「却下 (rejection)」と一致する。しかし、彼の実際の分類が真理条件的かどうかに基づいているために、事実上図の長方形内の重なるのない部分だけしか扱っていないことになる。²

次節では、このような「却下する」という発話行為を2種類に分けることが出来ることを指摘し、その具体的な説明を行う。

2. 「却下 (rejection)」とその種類

「却下 (rejection)」という発話行為が関与していると思われる文を整理すると、次の2つのタイプに分けられる。

- (16) a. The king of France isn't bald — there isn't any king of France.
 b. John didn't MANAGE to solve some problems — they were quite easy for him to do.
 c. Max doesn't regret inviting you — you gate-crashed!
(Burton-Roberts 1988: 98)
 d. I haven't stopped smoking — I've never smoked in my life!
(ibid.)
- (17) a. Max doesn't have three children — he has four.
 b. Max doesn't have three children — he has two.
 c. It isn't warm today — it's hot.
 d. It isn't hot today — it's warm.
 e. He didn't call the [pólis], he called the [polís].
 f. I didn't manage to trap two mongeese — I managed to trap two mongooses.

g. For a pessimist like him, the glass isn't half full — it's half empty.

(16)、(17)の各文がそれぞれ先行する発話に対する否定として発話されたと仮定する。(16)の各文では先行する発話が何らかの理由で相応しくないものとして却下 (rejection) されており、後半部分でその却下の理由が述べられている。一方、(17)は全て先行する発話や想定を却下 (rejection) するだけでなく、後半部分では却下したものの代わりに話者が適当であると思うものを補っている。つまり、ここでは却下(rejection)という発話行為以外に置き換え(substitution)という行為も行われている。こうしてみると、「却下(rejection)」という発話行為には(16)に代表されるような単に先行する発話や想定を却下する **rejection type** と、(17)のように却下しさらにその代わりとなるものを補う **rejection-substitution type** の2つのタイプがあることが分かる。

では、この「却下する (reject)」と「置き換える (substitute)」という発話行為は具体的にどのようなものであろうか。まず、下記の3つの対話を考えてみよう。

(9) A: The king of France is bald.

B: The king of France isn't bald — there isn't any king of France.

(10) A: The prime minister of Japan is bald.

B: The prime minister of Japan isn't bald, though his hair is getting thin these days.

(18) A: I heard John managed to solve the problems.

B: He didn't MANAGE to solve the problems — they were quite easy for him to do.

各 B 文は rejection type の文である。すなわち、話者はこれらの文を発話することによって、先行する発話 (の一部) を却下するという行為を行なっている。(9 B) ではフランスに王が存在しないという理由から先行する発話が却下され

ており、(10 B) では (10 A) の日本の首相に関する記述が正しくないために (すなわち日本の首相は禿げていないために)、この (10 A) の発話が却下されている。また、(18 B) では「ジョンが問題を解決するのに困難が伴った」という含意が不適切であるために、先行する発話内の *manage* という表現が却下されている。

次に、rejection-substitution type の場合を考えてみよう。

(11) A: I am going to give Christmas presents to Max's children. Yesterday I bought three teddy bears at TOYS "Я" S.

B: Max doesn't have three children — he has four. He has one daughter and three sons.

(13) A: Hi! It's warm today.

B: It isn't warm today — it's hot.

(19) A: Max witnessed the wanted man on the street. So he called the póllice.

B: He didn't call the [pólis], he called the [polís].

(11) では、まず先行する A の発話から推論される想定、すなわち「Max に 3 人の子供がいる」ということを却下し、その代わりとして B が正しいと思っている Max の子供の数を述べている。(13) でも同様で、B はまず先行する A の発話、すなわち「今日は暖かい」ということを却下し、それに代わる話者の考え(「今日は暑い」)を後半の節で述べている。また、(19 B) で却下されているのは、先行する発話の意味内容に関するものではなく、A の *police* という語の発音である。すなわち、この文を発話することによって B は A の発音を却下し、自分が正しいと思う *police* の発音を提示している。

このように rejection-substitution type は先行する発話や想定を却下し、その代わりとなるものを補うという発話行為を行っているが、ここに次のような 1 つの制約がある。

(20) The element rejected and the element substituted for it must belong to the same domain.

あるものを却下しその代わりとして別のものを補う場合、これら2つのものは同じ種類のものでなければいけない。認知文法の言葉を用いると、2つは同じ領域 (domain) に属していなければいけないということになる (Langacker 1987, 1991)。(11 B) で共通しているのは「子供の数 (the number of children)」という意味領域 (semantic domain) であり、(13 B) で共通しているのは「気温 (temperature)」という意味領域である。一方、(19 B) で共通しているのは、(11 B) や (13 B) のような意味の領域ではなくて、音韻的領域 (phonological domain) である。もし(20)のような制約が守られないと、下記のように容認不可能な文になる。

(21)??Max doesn't have three children — he has naughty children.

(22)??It isn't warm today — it's dark.

(23)??He didn't call the [pólice] — he called his friend.

これら3つの文が容認できないのは、ある要素を却下しその要素とは異なる領域に属する要素を補っているからである。(21)では子供の数を否定し、その代わりとして子供の性質を述べている。(22)ではある気温を否定し、その代わりとして暗さを述べている。(23)では発音上の問題を否定し、その代わりとして意味的に異なる単語を補っている。

以上の考えをより明確にするために、(13)と(19)を図式的に表わした。それが図2と図3である。それぞれの図の小さな円は発話の話題となっている実体 (entity) であり、それを取り囲んでいるのが領域 (domain) である。Bの発話を表わした図に示されている上向き矢印は却下 (rejection) を表わし、下向き矢印は置き換え (substitution) を表わす。そして各図の一番上の矢印は発話の時間軸を表わす。

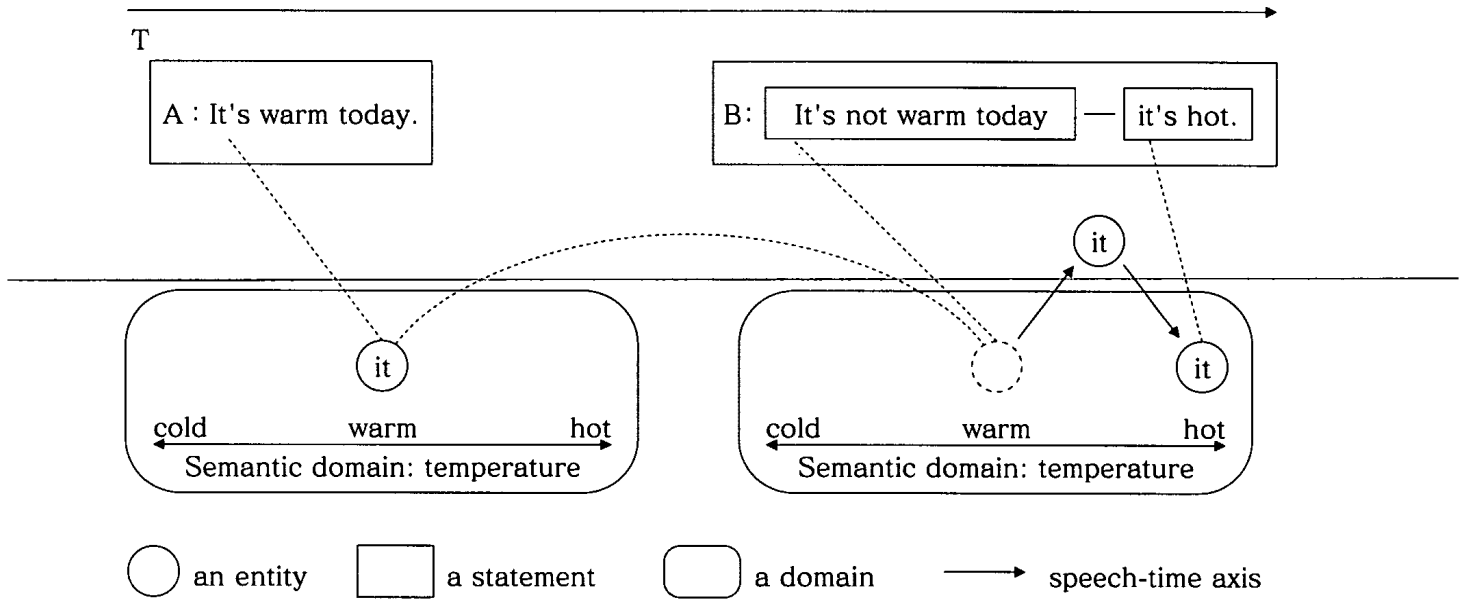


図 2

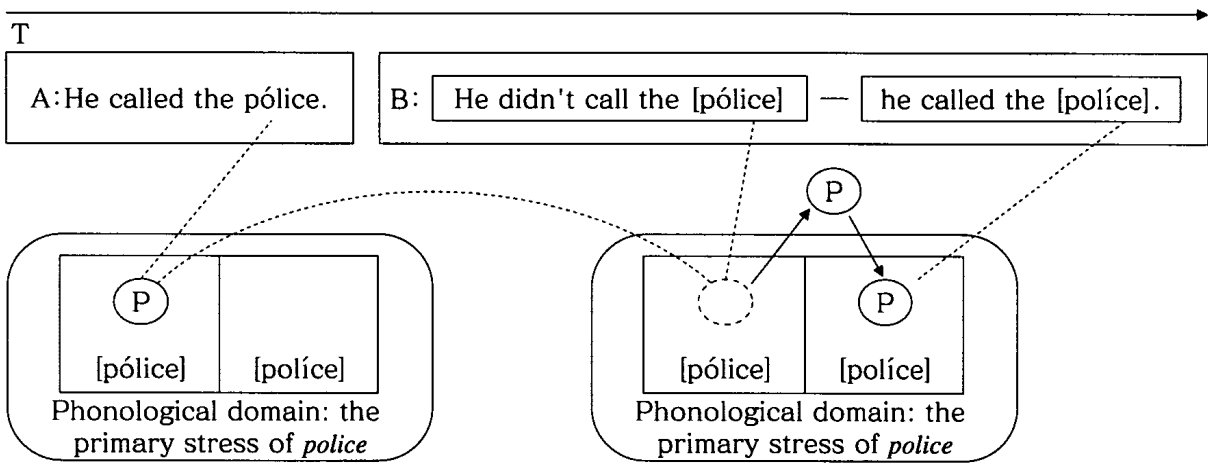


図 3

まず、A の発話によって、問題となる実体がある領域内の特定の場所に位置づけられる。(13)の場合、問題となる実体は意味的には「今日の気温の状態」だが、これは文法的には状況の *it* として言語化されている。図 2 の左側の図は、この *it* によって言語化された実体が、気温を表わす領域内の特定の場所に位置づけられていることを示している。また、(19)の場合、問題となる実体は *police* という語であり、A が発話することによって、この実体はこの語の第一強勢に

関する音韻領域内の特定の場所に位置づけられる。

これらの A の発話に後続する B の発話は、各実体の領域内の位置が適切ではないということを次のような手順で示す。まず、A の発話がある領域内に位置付けた実体を否定文を用いてその位置から取り除き、さらにそれに続く発話によってその実体を同じ領域内の別の場所に位置づける。このようにして考えると、rejection-substitution type の「却下 (rejection)」と「置き換え (substitution)」という行為は、この「取り除く」と「別の場所に位置づける」という 2 つの行為によって具体的に説明される。従って、rejection-substitution type は以下のように特徴づけられる。

(24) Rejection-substitution type involves the acts of removing an entity from the region in a domain specified by the previous utterance and of relocating it in a different region in the same domain.

3. SN-type 接続詞とその逆接的意味

最後に rejection-substitution type と逆接の意味との関係について触れる。このタイプの構文はよく逆接接続詞を用いて表現される。英語の場合は *not A but B* のように等位接続詞 *but* が用いられる。従って、これまで見てきた (13 B) や (19 B) は以下のように表わすことが出来る。

(13') It isn't warm but hot today.

(19') He didn't call the [pólis] but the [polís].

これらの文は意味的には (13 B) や (19 B) と同じなので、それぞれ図 2 や図 3 と同じ意味構造をしている。英語の *but* はこの用法以外に対照や譲歩など他の逆接の意味を表わすことも可能だが、ドイツ語の *sondern* やスペイン語の

sino はこの用法にしか用いられない。

Anscombe and Ducrot (1976) がこの種の接続詞を総称して SN-type と呼ぶことは既に述べた。一般的にこの SN-type の接続詞は逆接接続詞として分類されるが、この SN-type の逆接的意味 (correction や rectification と呼ばれる) が他の逆接の意味 (対照や譲歩) とどのような共通点があり、どのような違いがあるかは明確にされていない。そこでここでは、この SN-type の逆接の意味と対照 (contrast) の意味との共通点と相違点について述べる。

Izutsu (1998: 62) では、(25) に代表される対照の意味を (26) のように特徴づけ、その意味構造を図 4 のように表わした。

(25) John is rich, but Tom is poor.

(26) CONTRAST: Two clauses are in contrast with each other when the statements are in a symmetrical relation and contain different compared entities which occupy different regions in the same semantic domain.

すなわち、対照 (contrast) とは 2 つの異なる実体と同じ領域内の異なる位置を占めることによって成立する対立関係である。図 4 と既に見た図 2 の右側の図

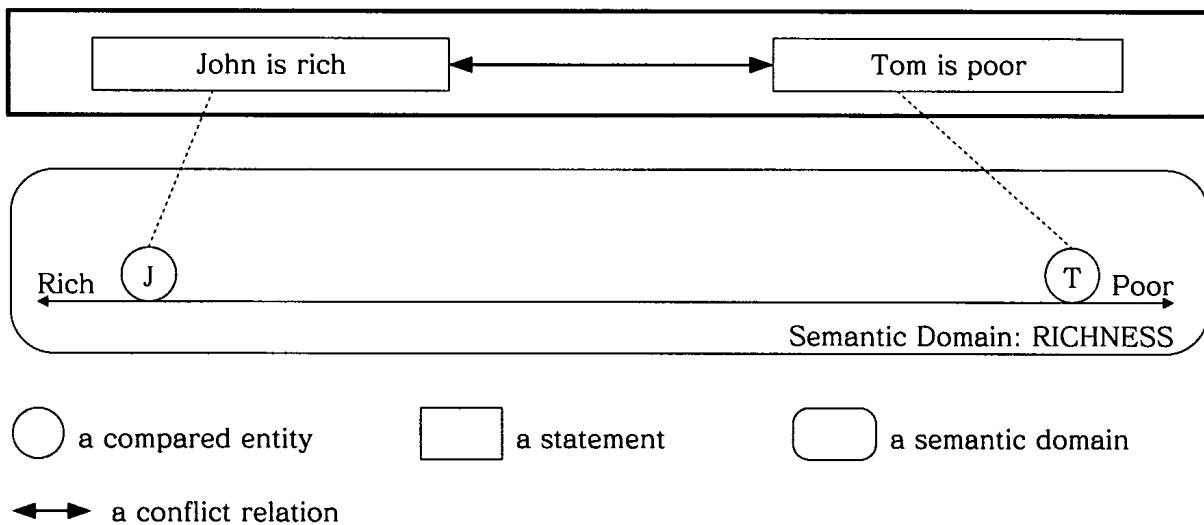


図 4

を比較すると、対照 (contrast) の意味と SN-type の接続詞によって表わされる逆接の意味との共通点・相違点が明らかになる。これら2つの逆接関係に共通しているのは、2つの実体と同じ領域内の異なる位置を占めているということである。この「領域内の異なる位置を占める」という意味特徴は譲歩の意味にも共通している (Izutsu 1998) ので、いわゆる逆接という意味範疇全体を特徴づける要素だと言える。

SN-type の逆接関係が対照 (contrast) と異なる点は3つある。まず1つ目の相違点は、対照の場合、領域内の異なる位置を占める2つの実体は同時にその領域の中に存在することが出来るのに対し、SN-type の場合、一方は他方によって置き換えられるので2つの実体は同時に共起することができない。2つ目の相違点は、対照の場合、領域内の2つの実体が異なるものでなければいけないのに対し、SN-type の場合は同一のものでなければいけないという点である。つまり、(25)では John と Tom という異なる実体が richness という意味領域の中に位置づけられているが、SN-type の (13') の場合領域の中に位置づけられる2つの実体は両方とも状況を表わす it によって言語化される同一の実体である。最後の相違点は、SN-type の逆接関係に関与する実体のうち1つは必ず先行する発話によって想起されなければいけないということである。このように先行する発話や想定が関与しているという点が、SN-type が対照よりある意味で dynamic な逆接関係として感じられる要因となっていると言えるかもしれない。

4. 結論

この論文では、Horn の提唱するメタ言語的否定という概念が、「既出の発話の否定」と「非真理関数的」という、整合性のない2つの特性に基づいていることを指摘した上で、前者の「既出の発話を否定する」という否定の用法をまとめて「却下 (rejection)」と呼んだ。そして、この用法には、却下だけを行う rejection type と却下と置き換え両方を行う rejection-substitution type とい

う2つのタイプがあることを指摘した。さらに、後者の rejection-substitution type に関しては、ある実体をある領域内の特定の場所から取り除き、その実体を同じ領域内の別の場所に位置づけるという行為として理解出来ることを示した。そして、このように分析することによって、このタイプ特有の SN-type の逆接の意味と対照 (contrast) の意味との共通点・相違点を明らかにした。

NOTES

- 1 ここで言う rejection はしばしば denial と呼ばれる (van der Sandt 1991, Guerts 1998)。
- 2 Horn が挙げている表現が必ずしもメタ言語的否定にならないということは、McCawley (1991) によっても言及されている。しかし McCawley は *not A but B* 形式についての議論に終始し、「既出の発話を否定する」という否定の発話行為的機能については一切触れていない。そのために、Horn のメタ言語的否定の問題点が明確化されていない。

REFERENCES

- Anscombe, J.C. and O. Ducrot (1977) "Deux mais en Français?", *Lingua* 43: 23-40.
- Burton-Roberts, N. (1989) "On Horn's dilemma: presupposition and negation," *Journal of Linguistics* 25: 95-125.
- Carston, R. (1996) "Metalinguistic negation and echoic use," *Journal of Pragmatics* 25: 309-330.
- Dancygier, B. (1992) "Two metatextual operators: negation and conditionality in English and Polish," *BLS* 18: 61-75.
- Frege, G. (1892) "Über Sinn und Bedeutung," *Zeitschrift für Philosophie und philosophische Kritik*, NF 100: 25-50. [Translated as "On sense and refer-

- ence,” in *Translations from the Philosophical Writings of Gottlob Frege*, ed. by P. Geach & B. Black, 56-78. Oxford: Blackwell, 1952.].
- Guerts, B. (1998) “The mechanisms of denial,” *Language* 74 (2): 274-307.
- Horn, L.R. (1985) “Metalinguistic negation and pragmatic ambiguity,” *Language* 61 (1): 121-174.
- Horn, L.R. (1989) *A Natural History of Negation*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Izutsu, M.N. (1998) “Semantic characterization of contrast and concessive: their commonality and difference,” *Hokkaido Eigo Eibungaku* 43: 59-72.
- Langacker, R. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. I: Theoretical Prerequisites*, Stanford: Stanford University Press.
- Langacker, R. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, Vol. II: Descriptive Application*, Stanford: Stanford University Press.
- McCawley, J.D. (1991) “Contrastive negation and metalinguistic negation,” *CLS* 27: 189-206.
- Strawson, P.F. (1950) “On referring,” *Mind* 59: 320-44.
- Sweetser, E.E. (1990) *From Etymology to Pragmatics*, Cambridge: CUP.
- van der Sandt, R.A. (1991) “Denial,” *CLS* 27: 331-344.